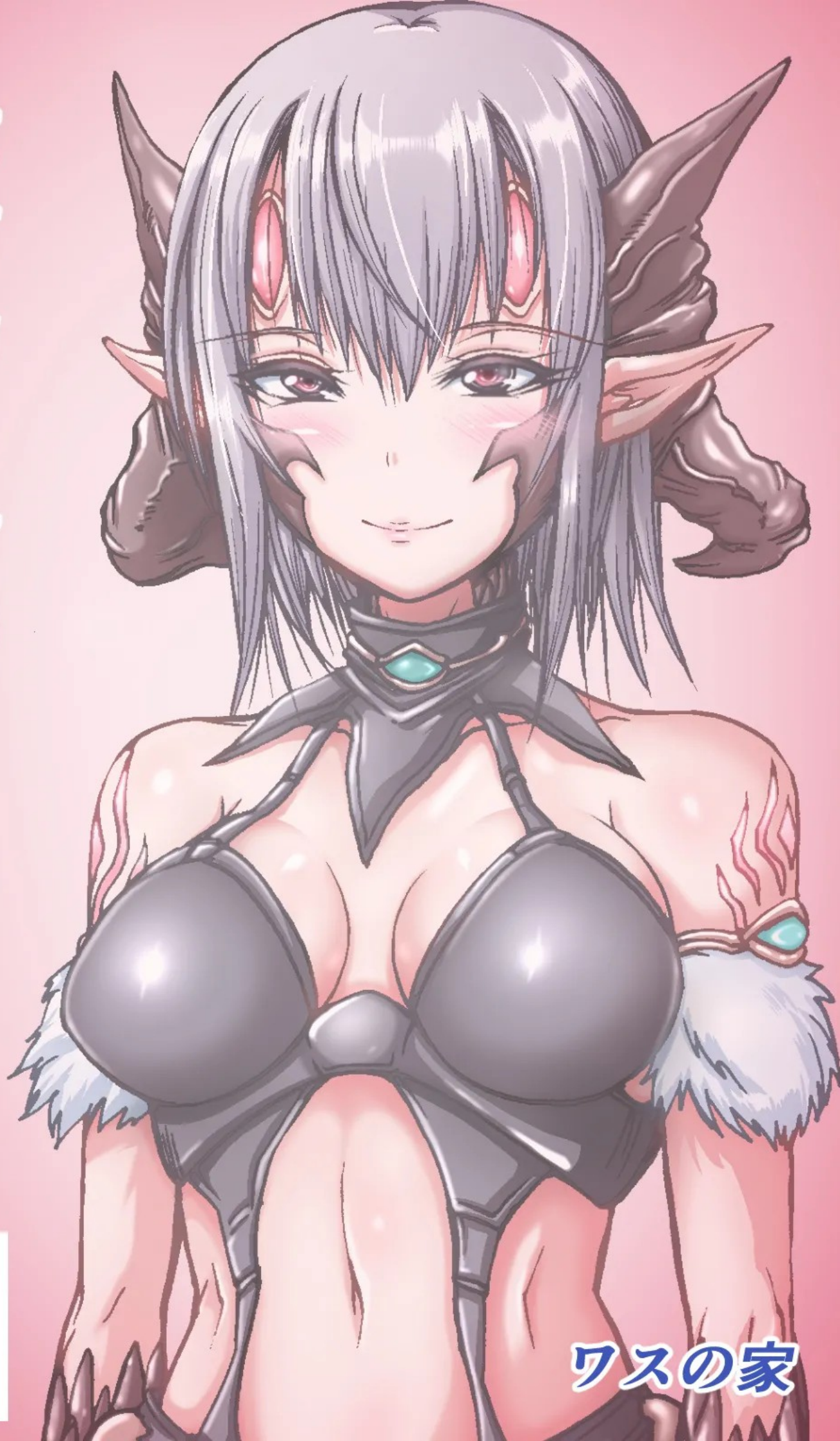


不可神な君のために



18禁
成人向け

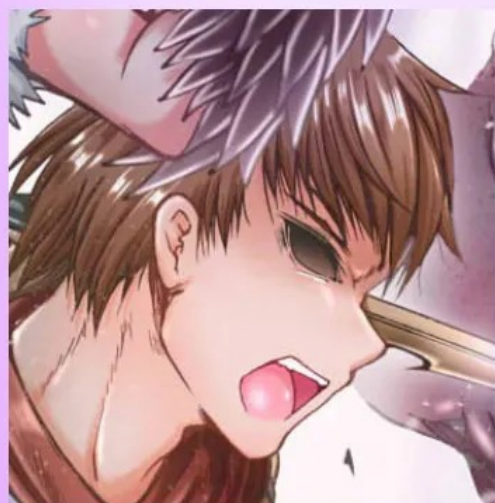
ワスの家

登場人物紹介



「ヘル」

本作のヒロイン、主人公と主従の契約を結んだ
強大な魔力も持つ死神、如何なる攻撃や力を受けても影響を
受けることは無い無敵の肉体を持つことから畏怖をもって
「不可神」と呼ばれている 主人公と共に人々を襲う悪魔と
戦っている 感情の起伏が少なく物静かな性格
共に戦う中で主人公に契約者以上の感情を抱くようになる



「ゼルファ」

本作の主人公、悪魔退治のために戦う騎士、元は敵同士だった
ヘルと契約し協力しながら悪魔と戦う
正義感に溢れ、根は優しいのだが人付き合いが苦手で協調性が
ないので部隊に属してはいない 血気盛んで戦場では剣一つで
悪魔達を切り伏せていく 数々の戦果をあげる勇敢な騎士だが
その性格もあって出世はできず 友人も少なく恋人ができた
経験もない

「不可神へル」…その死神は強大な魔力によりあらゆる敵を殲滅させ
どんな攻撃であっても傷二つ付けられない肉体を持つことから
人々から畏怖を持ってそう呼ばれている……俺はそんな彼女と契約を結んだ

実は昔は互いに戦い合う間柄だったりしたのだが
今では肩を並べ共に人間達を襲う悪魔共
と戦う日々を送っている



彼女……ヘルは寡黙で感情や表情の起伏が少なく
何を考えているか分からず取っつきにくい所はあったが
俺たちは結構うまくやっている 俺も人付き合いは苦手で
騒がしいのは嫌いだ……だから馬が合うのかもしれない

戦場を共にすることで芽生える友情もある
俺達は悪魔討伐の功績を評価され今は人里離れた場所にある
わりと豪勢な屋敷を与えられそこで二人で暮らしている……
そしてそれはまた戦いを終え帰ってきたある夜のこと……



「主…傷はどう？」

「ああ、すっかり治った…問題ない
ヘルの治療魔法のおかげだ、いつも悪いな」

「…私を庇ったりする必要は無い…私はあんな攻撃では傷つかない…
それに何度も言ってるけど主は前に出て戦いすぎ…あんなのは悪魔と契約した
人間の戦い方じゃない…」

「それは性分だから仕方ないな…それに女の後ろに隠れて戦うなんて
情けないだろ 俺はお前を使うんじゃない、お前と一緒に戦いたいんだよ」

「………」

「主…突然だが私があなたを愛していると言ったら…
主は困るか…?」

「え? な、なんだ…?
急に何を言い出すんだ?」

「…伝えておかなくてはいけないと思った…
私達は明日には戦場で命を落とすかもしれない
そういう生き方をしている…だから
私は主と契約者以上の関係になりたい…」

「ちよっ…待て…え?
ほ、本気…なのか? あ…」



「……やはり私ではダメか……？私は人間ではない……
角も耳も……こんな体は……気持ち悪いかな？」

「そ、そんなことはない……俺にそういう偏見は無い……
むしろお前は良い女だ、俺の知ってる限り抜群に……だが
話が急すぎて……その……心の準備が……！」

「……ふふ、主動揺してる……こういうのは
得意ではないようだ……なら今は攻め時……」

「え……ちょ……待っ……！」



「ん…ちゅっ…」

「んっ…ふ…!」



「んは…とうとうしてしまっただ…主と接吻…」

「…すごくドキドキする…戦う時よりも…
私はずっと主とこんなことがしてみたかった…」

「…べ、べル…」

「…!」

「…主のここ大きくなってる…」

「え、あ…違う…これは…」

「いい…私は嬉しい…
だから私が慰めてあげる…」

「ちょ…待ってくれ
いきなりか…!!
お、俺はそっちは
からつきしだから…その」

「…大丈夫私も初めて…でも死神は
こういうの得意…人間の本能に
訴えかけるものだから…だから私に任せて…」

「…ヘル…」

「じゃあ…見せて主の…」



「...これが主の...初めて見たけど、これ...
勃起してるんだよね...?」

「...あ、ああ...」

「...嬉しい主が私で興奮している...
私、頑張るからいっぱい気持ちよくなって...」

「ベロ...出して...ん...ちゅっ
ちゅび...ちゅっ」



「んちゅっ…ちゅっちゅくっ
ん…は…んっちゅ」

「ふはあ…キス…いい
主と恋人になったみたい…」

「…主のここピクピク
震えてる…なんか面白い
…」

「…触らして…可愛い、主のここ…」



「く……っ」

「……熱くて硬い……これが……」

「ん……ふ……これ、手の中で
ピクピク震えてる……
変な感じ……
気持ち良いの……？」

「……やめろ、いちいち
聞くな……恥ずかしい……」

「……気持ちいいんだ
……ならもつと触る……」

はぁ

はぁ

「ん……んしょ……ん
ふっ……」

「う……く……」

「……可愛い、感じている主
もつと刺激してあげる……」

ピクッ

ピクッ
ぐりッ
ぎゅッ
ピクッ



「…はあっ！」

「…分かる…こうすると主が
気持ち良くなるの…」

「ん…ふっ…んっ
くっ…」

「くっ…あっ」

「主の…私の手の中で
どんどん大きくなってる
…」

ぐわっ
ぐわっ
ぐわっ
ぐわっ
ぐわっ

ん

ふ

「はあ…はあ…
もっとこうすれば…」

「おおっ！」



「…なんか先っぽから溢れてきた
これ…ねちょねちょしてる…」

「…これ…
滑りが良くなつて
もっと気持ちよくできる…」

「キスももつとしたい…
ん…あむっちゅっ」

「ん…んふっ
…んっ!」

「ん…ちゅぶっちゅっ
ちゅく…れるっ…んっ…ふっ」



「んちゅっ…ちゅぶつれるっ
ちゅっ！」

「んちゅ…ちゅっ…！」

「なんか…主の

ビクビク波打ってる…

主…もしかしてこれ…？」

「う……」

「…主…射精しそうなんだ…
私にここ触られて…感じて…」

「ん…ちゅっ…待つ…！」

「んっ！
んっ！
んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「んっ！」

「嬉しい…ちゃんと
最後までしてあげる
…だからいっぱい
気持ちよくなつて…」

「んっ…ちゅっ
ちゅっ…ぶちゅっ！」



「んちゅっ……はあ、はあ
ちゅるっ……主のここ、すごい熱くて
弾けそう……我慢しないで……
射精して……私の手で気持ちよくなって」

「くっ……あっ……はあ……！」

「はあはあ……見せて
主が射精するところ
……！」

ちゅ!

ちゅぱ!

ちゅる

じゅん
じゅんちゅ、
ちゅ、ちゅ、

ちゅ
ちゅん
ちゅん

ちゅん

「う……も、もう……あっ！」

はあ

ちゅん

「はあ……はあ……
主……主！」





「く…あ…はあ、はあ…」

「…これが主の精子…熱くて…どうどう…
変な手触り…」

「…いっぱい出た…これは気持ちよかった
ということが良い…?」

「…あ、ああ…」

「ふふ…嬉しい…」

「主が私の手で射精した…
射精する時の顔…可愛かった
主のあんな顔初めて…」

「う、うるさい…ていうか…なんかヤバかったぞ…
本当に初めてだったのか…?」

「…当たり前、主にしか
こんなことしない…
だから得意だといったはず…」

ほ。

ほ。

「そ…そうなのか…」

「…それより主のここ
まだ硬くなったまま…」

「あ…」

ほ。

ほ。

「…大丈夫まだまだこれから…
もっといっぱい射精させる…次は…」

ピク
ピク
トロオ…

「ふふ……」

「……な、なんだよ」

「主……嬉しそう 知っている
人間の男はこういう眺めが好き……」

「……主、期待してる
主が何して欲しいか
分かる……」

「う……」

「回する……
私も主のもの……啜えてみたい」



「…主のここまたビクビク震えて
大きくなってきた…私に舐めて
欲しがつてる…」

「…やめろ、そんなじろじろ見るな
…それに悪魔とが言うなよ」

「…お前がそんな下品な冗談
かますとは…」

「近くで見ると変な形してる…
ちよつと悪魔に似ている…」

「この悪魔も
私が倒す…いっぱい射精させて…」

「…今日は特別
私…今舞い上がってる…」

「ん…匂いも独特…」

「そーいや…風呂入った
ほうが良くないか…
汚いだろ…?」

「必要ない…別に嫌じゃないし
それに私の口で綺麗にするから…
じゃあ…そろそろいただく」



「ん……ちゅっ……ちゅびっ……」

「ん……」

「れる……ちゅっ……んっ
これが……主の味……」

「くちゅっ……ちゅび……ちゅっ
ぺちゅ……はあはあ……んっ」

「ちゅっ……んっ……
おいしい……ちゅっ」

「ん……ん……あっ」



「ちゅっ……ふはあ……
主……どう？私の口……
んっちゅ……ぶちゅ」

「あ……ああ……」

「……主、感じてる……もっど
舐める……ちゅっ
れる……んっ……ぶっ……ちゅっ」

「んっ……んっ」

「……ん……お汁……また溢れてきた
くちゅっ……それに……さつきより
大きくなってる……
ちゅるっちゅっじゅぶっ……」

「れるっちゅっぶちゅっ……はあはあ
ん……美味しい……もっど主の
味わいたい……」



「ぐふっ……ちゅ……れるっ……ちゅっ」

「ん……っ！」

「はむ……んじゅっ……ちゅぶっ
ちゅぶっ……やちっ……ちゅっ！」

「んーんぐっ……んっちゅっ
ちゅっ……あむっちゅっじゅるるっ！」

「くあっ……
ちよつまっ……」

「ふー、ふー、
れるっぶちゅっくちゅっ！」



「ぐふっ……ちゅ……れるっ……ちゅっ」 「ん……っ！」

「はむ……んじゅっ……ちゅぶっ
ちゅぶっ……んちゅ……ちゅっ！」 「ん……ん……ん……ちゅっ
ちゅっ……あむちゅっじゅるるっ！」

「く……あ……
ちよ……ま……」

「……ちゅ……ちゅ……っ！」

「ふー、ふー、
れるっぶちゅっくちゅっ！」

「んっぐちゅっちゅばっ
んっちゅっちゅぶっ！
んーっ……っ！」





「ん…ふはあつ…はあ
主…またいつばい出た…」

「お悪い…
我慢できなかった…」

「構わない…んっ私の口の中
主の精液でいつばい…ちゅっ」

「は、吐き出せよ
そんなの…」

「断る…主のこれ美味しい…全部
舐める…んっれるっあむっちゅっ…」

「んっ…」

「んちゅっ…ちゅるるっ…ん？
主の…また硬くなってきた…
興奮してる…私が精液舐めるの見て
…」

「ぞういうわけじゃ…」

「このまま…続ける…
また主射精させる…」

「んちゅっ…ちゅっ
れる…ぴちやっちゅっくちゅっ！」



「んぶっ…じゅっくちゅっ
ちゅっ…じゅりゅりゅっ!ちゅっ」

「くぁ…おおい出したばっかで
そんな激しく…!」

「んちゅっくちゅっ
くぶ…ちゅつれる…じゅっ!」



「ごぶっ…ぶっぶちゅっじゅぶぶ
ずりゅりゅ…んっくちゅっんちゅっ!」

「うぁ…あっ!」
「んっ!んふっんくっ
ちゅっずちゅっ!ちゅぶぶっ!
くちゅうっ!ちゅっ!」

「...くっだめだ...こんな
また...っ!」

「んっ!...ふっ
ちゅぶっ!ぐちゅ
ずちゅっ...ひい...!」

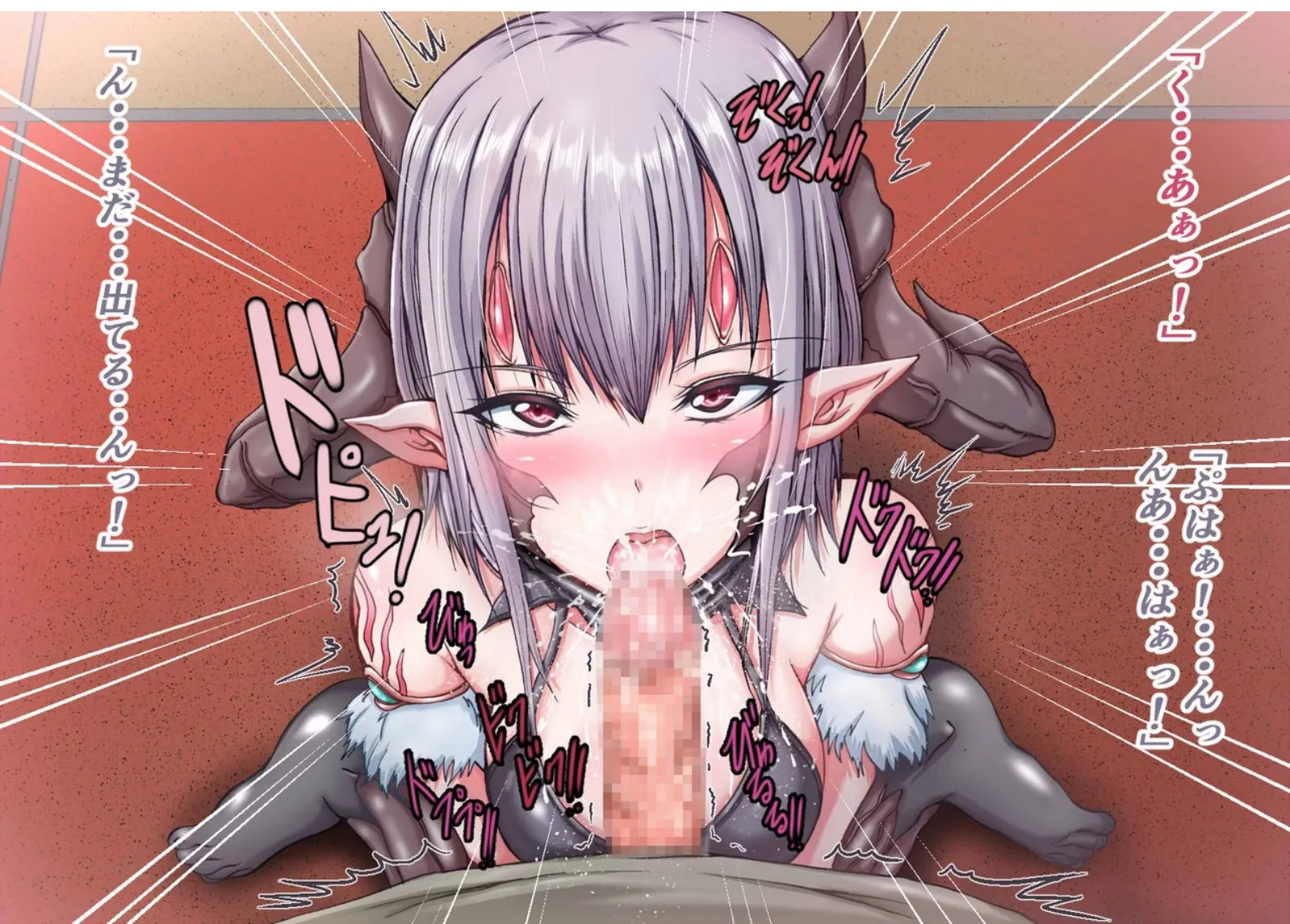
「だひて...んつくちゅっ
ぺちゅ...わたひのなか...くちゅっ!」

「ちよおらい...んつくぶっ!
ちゅくっ...あるひの...せいえひ...
んつくちゅつちやぶんっ!」

「くあ...ああう!」

「ふー!ふー!
んぶっがぼっ!ずちゅっ
んんんん!!」





「…はあはあ…」

「んちゅ…べろ…
ちゅぶ…あむ…ぐっ」

「…ふふっ主、2回も射精した
…私の口で…」

「はあ…本当に
得意なんだな…こういうこと
また一つ死神の恐ろしさを見た気がする…」

ドキ

「…ふふ、主 本当にすごいのは
これから…」

「主と私…繋がる一つになる…」

「…お、おいそれって…」

「ちよつと待て…!!
流石に今からずいぶんは
息子がもたない…」

「問題ない…
私が何度でも大きくさせる…」

「お、おい…」



ヘルは俺の目の前で服を脱ぎ捨てた…

「うお…」

「…どう主…？私の裸…」

「いや…どうって…」

「…ふふ主のそこ、また大きくなってきた…主は変態…死神の裸で勃起してる…」

「う、うるさい…というか今更だろさつきから俺はお前にイカされまくってるんだぞ！」

「…私の初めて主に捧げる…」

「ヘル…」

「…ふふ、それもそう…でも私はそんな主が好き…だから」

「主はじつとして…私がしてあげる…」



「ん……んしょっ」

「くっ……うあっ!」

「もう……少し……ん……これでっ」

「!? あああっ!!」

「……ああ入ってる……主のが

私の中……やっと主と一つになれた……」

「ちょ……待っ……なんだよこれ……!?」

ドキ
ドキ

「主……私の中……気持ち良い?」

「いやいや!……そんな次元じゃない……これが死神の……?
や、ヤバすぎる……ちんこ溶けそうだ……!」

「ふふ、よかった……じゃあ動くから
いっぱい気持ちよくなつて……私は
痛みを感じないから初めてでもいっぱい動ける……」

「……ま、待ってくれ……!
こんなんで動かれたら……」

みち
ビッ
ぎち
ぎち

「ん…は…んっ」

「!?うおお…!!
あああっ!」

「ん…ふっ…んは…んっ」

「くあっ…あっはああっ!」

はぁ
ギョ

ぷるん

はぁ
「…主の、
私の中でビクビク震えてる…」

ギョ

「う…嘘だろ?なんだよ…これ
刺激…ヤバすぎる…!」

「ん…ふっこれがセックス…
私、今主とセックスしてる…変な感じ…」

「な…何をそんな冷静に…
こ、こっちは…はあっ!!」

ギョ

ちふん

ぬちゅ

ギョ

「…主がすごい感じてるの分かる…
手とか口の時より…
私の中から伝わってくる…」

「もっといっぱい動く…
主、喜ばせる」

「くっ…うあ…ヤバすぎる…
こんなの…っ!」

「いや…待って…!
やめ…うああっ!」

ぷるん!

ギョッ

はあ

はあ

「んっ…はっんっ主…どう?」

「くっああ…もう…だめ…!」

ギョッ

「はあ…はあ…もっと…
もっと動いてあげ…」

ぬち!! ギョッ ぶち!! じゅっ!!

「うあ……イツ……ああっ!!」

「……え?」

「うぐ……あ……はあはあ……」

「主……もう射精してしまったのか……」

はっ

はっ

「はあ……はあ……だ、だから……ヤバイって言うてただろ……
どうなってんだよ……お前の膣内……あんなの我慢できるか
……中出ししちまったじゃねえか……」

「……はあはあ……とにかくヤバかった……」

「まだ……」

「え……?」

「それは問題ない……
というかそうしてもらおうつもりだった……」

ドッ
ビッ!!
ビッ!!
ビッ!!

「まだ主との初めては始まったばかり…
私はもっと主とセックスしたい…主の精液が欲しい」

「いやいやいや！…流石にもう無理だ今日は
もう終わりにしよう…ちょっと休ませてくれ…」

「いや…やっと主と繋がれた…もつと
いっぱいする…」

「ま、マジでもう無理だ…うあっ！」



人ロオ… ビクッビクッ

「ん……ふっ……んっ！」

「ふふ……大丈夫 こうやって腰を振れば
主は何度だって勃起する……」

「うわ……ほ、本当にもう
アソコが……あっ！」

「くぅ……ああっ！」

ぷるん！
ゴッ

スチャッ
ズッ

ずゅっ!!
じゅっ!!

ゴッ

ぬちゃ!!

「ひぐ……うっ！」

「……ほらまた硬くなってきた……
まだまだ……続けられる……」

「ちよつと動き変えてみる……こういうのはどう？」

「!? おっ……おおっ!?」



「はあ……はあ……主
またッ射精する……いい
いっぱい出して……私の中で……！」

「はあ……はあ……主

またッ射精する……いいっぱい出して……私の

「あっあっあーっ!!」



「ん……んふ……」

「イ……イグツイグツあ……あつ！」

ぞくぞく!!

「…もつともつと絞り出す…！」

「あっひっあふ……があ……！」

ドグドグ!!



ウハッ!!

「…はあはあ…主すごい…さっきよりいっぱい出した…嬉しい、私の中…主の精液でいっぱい…でもまだ終わらない…もっともっといっぱいする…ん？」

「……」

「……主？」

「……」

「あ、主…気絶してる…」



ビッ

ビッ

ビッ

ビッ

ん

ん

それからしばらくして俺は目を覚ました

「…申し訳ない…少し我を見失っていた…」

「…はは…あやうく腹上死するところだった…まさかお前があんな淫魔だったとは思わなかった…」

「…す、すまない…」

「まあもういいさ」

俺もこうなれて嬉しかったしな」

「…え？」

「…お前から言われてっつのが男としてはなんとも情けないところだが…俺もお前のことが好きだったみたいだな…」

「…本当に？…いいの？」

私は死神で…」

「関係ない…俺にはお前以上の女はいないよ…」

「…よかった…勇気を出して…有難う…主…」

そう言って笑ったヘルは少し泣いていた 俺はそんなヘルを抱きしめた…



それから俺達は何度も体を重ねた……

俺はその度に何度も何度も枯れるほどイカされた……

だけどその中でヘルが快感を感じることは1度もなかった

……あらゆる攻撃を無効化する彼女の肉体はいかなる影響も

受けることは無い……俺達の肉体関係は俺がただ奉仕を受ける

だけのものだ……だヘルにとって俺への奉仕は喜びらしく

日に日にそれは激しくなっていた……

「ふふ…主」

「な、なんだよ…」

「今日はどんな風にして欲しい？」

そう言つてヘルは足でおれの股間に触れてきた



「…くっ」

「主のこころ…ふっくらしてきた」

「…今日はこのまま足で俺の下半身を露出させた」

ヘルは器用に足で俺の下半身を露出させた

「ふふ…主の、もうこんなになってる…
足から温かさ…伝わってくる…」

「お、お前はこういうのどこで覚えてくるんだい…?」

「主はこういうの好きそうって
思っただけ…
主は私に弄られて
犯されるのが大好き…」

ふふ

「…お前そういう言い方…」

「だって事実…だから足でいっぱい気持ちよくしてあげる…」



「んしょ……んっ……ふっ」

「く……っ」

「先っぽ……こうすれば
気持ち良いはず……んっ」

「は、
「どう、主……私の足……？人間より器用に
動かせるから気持ちよいはず……」

「ん……く……ああ……」



「…ふふ先っぽからもうお汁出てきた…
主…気持ちいいんだ…」

「…主は変態…こんな風に
足でされて感じている…」

「し、しかたないだろ…お前が
全身性器すぎるんだよ…！」

「ふふ…それ、面白い…じゃあ
私の体で変態の主をもっと興奮させてあげる…」



そう言ってヘルは服を脱ぎ始めた

「う……」

「ふふ……どう？良い眺め……刺激的なはず」

「お、おま……
自分でそれを言うか……？」

「でも主のこ……もつと硬くなった……もう
バキバキ……」

「それは……」

「ふふ……主私の胸とアソコ見すぎ……主は私の体の虜……」



「んっ……ふっ……んっはっ……」

「くあ……っ」

「……はあはあ
主のお汁……溢れて止まらない
……これでもっと滑り良くなる……」

びしょ

「ん……くっ……」

「もう……私の足もネチャネチャ……熱くて溶けそうで
主の足と二つになつたみたい……」



「はあ……はあ……あつ
主のビクビク震えてる……分かる……
主、射精したがつてる……」

「もっと……もっと刺激する……」

「おお……っ!」

はぁ

「ん……はあ……んくっ……んっん!」

「くあ……だめだ……これっ!」







「んあ……はあはあ出てる……主の精液いっぱい……主の……射精……幸せ……」

「あ……イッあーっ!!」

「はあ……ああ」

ドクドク!!

ドク

ズン

ズン

ビュッ!!

ビュッ!!

「はあ……はあ……」

「ふふ……主、いっぱい出した……
私の足……主の精液でドロドロ……」

「死神に足コキされて
可愛く喘いでいっぱい射精する……
私だけが知っている主の顔……」

「はあ……可愛い……おまえ……」

「だって主のイキ顔可愛い……じゃあ次はどうする？
どんな風に私に弄られたい……？」

そのままその日もヘルの奉仕は
俺が干からびるまで続いた……



別の日、風呂場での出来事

「主、背中流す」

「お、おい！いきなり入ってくるなよ……そんな格好で……」

「風呂にはいるんだから裸で当たり前……
それに今更恥ずかしがることなんてない」

「まあ……そりゃそうだが……じゃあ
頼む……」

「い、言っとくけど
体洗ってくれるだけでいいからな……」

「何を笑っている……」

「ふふ……分かっている」

「なんでもない……それより……」



「主はなぜこつちを向かない？」

「わ、分かってて聞いてるだろお前……」

「ふふ……私にはよく分からない……」

私の裸を見て主の下半身が
どんな状態になってしまっているかなんて……」

「ふふ……とにかく体洗わせて……」

「ああ……」

「……お前なあ……」



「ん……んしょ……ん、主は今日の戦いも
頑張った……」

「ん、ああ……確かに今日はなかなか激戦だったな……」

「……だから、これはご褒美……」

「ん……!」

「ん…んしょ…んっ…ふっ」

「お、おい…なんで胸を押し付けて…」

「…布がわり…私の胸で主の体
隅々まで洗う…ん…ふっ」

「ん…ふ…背中に感じる？
私の乳首の感覚…」

ドキ

ドキ

「ちょ…待て
洗うだけじゃ…くっ」

ぐし

ぬっ

ぐし

ぴん

「そう…これは洗っているだけ…だから主、
前の方も見せて…前も綺麗にしなきゃ…」

「待て…やめ…」

「ほら…主」



「...ふふ 主、これはどういうこと？
どうして主のここはこんな風になっている？」

「お、お前は俺を辱めるのが
そんなに楽しいのか...！」

「至極の喜び...」

「お前...本当に最近
いやらしすぎるぞ...」

チヤ

ぬっ
ふっ

はあ

はあ

「いやらしいのは主のほう...
こんなにペニス勃起させてる...」

ピッ

ピッ

「くそ...っ！」

「ふふ...可愛すぎる...主...
可愛い主の勃起ペニス...触らせて...」



「…んっ」

「…すごい、主の…ガチガチの
バキバキ…」

「主はもう私に調教されてる…
私に触れられるだけで…主は
こんな風になってしまう…」

「うあ…そんな触り方…」



「ここは…丹念に洗って綺麗にしないと
大切な私の勃起ペニス…」

「お、お前のものじゃな…あっ!」

「ん…ふ…んしょ…ふふ、主は
こうやって先っぽを弄られるのが好き…」

「く…んあっ…」

「ん…ちゅっぺろ…」

「う…っ！」

「れる…ちゅっ…ぺろ…
ちゅぶっちゅ…」

「くあ…あつ…
そこっ！」

「んちゅ…ちゅび…はあ
…主のお汁と石鹸の泡で…よく
滑る…主の、私の手でどんだん
大きくなってる…」

「ん…んふ…べるっ
主…主い…ちゅっ」

「だめだ…これ、ヤバすぎる…
こんなのすぐに…！」

「んちゅっちゅっちゅっん！」

「うあ…イツ…！」



「ん……って……あれ？」

「ふふ……どうしたの主？」

「え……いや……」

「主はどうしてそんなに
残念そうな顔してる？」

「お、お前……」

「ふふ……主は出すのが
早すぎる……もうちょっと我慢
……お預け……」

「す、好き勝手やりやがって……」

「主……イキたい？
私の手でいつばい射精したい？」

「……」

「……ちゃんとおねだりしないと
してあげない……」

「ふ、ふざけるな……俺も
流石にそこまでは堕ちてねえ！」

「ふふ……すまない……最近の主は可愛すぎて
つい苛めたくなってしまう……」



「ふふ…そんな泣きそうな顔しなくても
ちゃんと最後までする…それに我慢した分
すごい気持ちよくなれる…」

「誰がそんな顔…んっ！」

「んしょ…んっふ…ん…
すごい…主の先っぽ…真っ赤…
パンパンで弾けそう…」

「…ふ…く…
あつままた…そこ！」

「ん…ふっ裏も…袋も…
全部刺激してあげる…はあはあ
ん…ふっ」

「んく…くっ…あっ！」

「ん…はあ…んっあっ」



「んっ!...んふっふ...んっ!」

「うあっ!だめだ...本当にもう...!」

「んちゅ...ちゅ...ちゅふ...
いいよ...今度は好きにだけ
いっぱい出して...!」

「く...う...あっはあ!」

「れるっちゅふっ...出して...私の手で
気持ちよくなつて...!」
「ドピュドピュって...射精して...!」

「あっ...もう...ああ...あーっ!」





「く…うあーっ！」

「！」

「ああ…出てる…ビューって…
主の…波打ってるのが
手から伝わる…！」

「ふあ…あつ…くあつ！」

「…すごいまだ出てる…」

ビュッ
ビュッ

ビュッ

ズン!

ビュッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

ガッガッ!!

ガッガッ

「はあ……はあ……」

「……どう？我慢した分
気持ちよかったでしょ……？」

「はあ……い……い……ち……ち……聞……く……な……
分……か……つ……て……る……だ……ろ……」

「ふふ……照れてる主も可愛い……
可愛いから……まだ続ける……」

「お、おい……今すぐか……？」

「うん……じゃあ主、寝そべって……
今度は前も洗ってあげる……」

「な、何する気だ……？」

「……胸で気持ち良くしてあげる……」



「ん……はあ……んんっしょ……」

ヘルは仰向けになった俺の体に
胸を擦りつけたあと俺の
モノを胸で挟み込んだ……

ぷるんっ

ドキドキ

ビッ!!

ビッ!!

「はあ……はあ……感じる……私の胸の中で
主のペニスがどんどん元氣を取り戻していくの……」

「おお……なんだこれ……弾力がヤバイ……っ」

「ふふ……いっぱい味わって、私のおっぱい……」

「ん……はあ……ん……ふっ……」

「うおっ……!」

はあ

はあ

「ん……はあ……主のが私の胸の中で
ビクビク震えてる……もうこんな
ガチガチ……主は射精は早い代わりに
復活も早い……」

「な、
なんだそりや……」

「さっき出した精液で……良く滑る

ん……はあ……んっ主の、

飛び出しそうになるくらい喜んでる……んっ」

ビク!

ビク!!

たぶっ

たぶっ

ぶっ!!

あゅっ

ぬっ!!

「はぁ……んっふ……うう……すねば……」

んっ

はぁ

はぁ

「ん……んしょ……私の乳首どう？
コリコリして……良い刺激になるはず……」

「はぁ……あくっ……」

「んく……んっは……あ、また溢れてきた……
主のエッチなお汁……」

「あぁ……っ！」

ぴゅっ
フリフリ
ぴゅっ
ぴゅっ
ぴゅっ

たぷっ

きゅっ

ぎゅっ

「主の…舐める…」

ん…ちゅっ…れるっちゅぶ…くちゅっんちゅっ」

「ん…やっぱりおいしい…主のペニス…
ちゅるっじゅるるっちゅっぺちゅっ!」

「くあ…だめだ…
さっきイッたばっかで…
そんな激しくされたら…」

「んちゅっぺちゅっくちゅ…ずちゅちゅ…ちゅっちやぶっ!」

はっ

ん

ちゅ
ちゅ
ちゅ

4回
4回

れる
ピッピッ!!

「お、おお…っ!」

たぶ
たぶん

ぎゅむ

「うああ……だめだ……こんな……またっ！」

「こんちゅ！くちゅっじゅぼっ！……いい……だひて……私の胸と口に……いっぱいっんぷっがぼぼっ！」

「くあつ……あつあーっ!!」

「ん……んくっ……んっ！」

ズッ
ズッ!!

Whizz!!



「アッ!」

エグー!!

「んぷ……ぷはっ！はあ、はあ……すごい……
さっきよりもたくさん出た……」

「また…綺麗にしないと…ちゅっ…
れる…あむっ…ちゅるる、ごく…れるっ」

「あ…ああっ…またあっ！」

「んちゅっ…ちゅ
ぴ…ちろ…ちゅくゆ
ん…！」

「はああ…！ヤバ…もうだめ…
こんなの…永遠に…！」

「んぷ…主のここ…まだビクビク
震えてる…もっと出したいつて言ってる…んっ
じゅるるるっちゅっ！」

れるっ

あむ

ビッ
ビッ

ビッ
ビッ

フリ
フリ

ズ
ズ

ビッ
ビッ

ビッ
ビッ

「ん…はあ…んしょ！ほら、主頑張つて…もつと
もつと出せる…！」

「あ…ああ…もう…だめ…！」

「んっんふっんっ！もつと…欲しい…主の精液
…もつと私の胸にいつぱい頂戴…！」

「うあっ…あっイクっ…
あつまたイク…あーっ!!」

「はあはあ頑張れ…
頑張つて…主！」



ぐぐっ!!

ひゅ!!

ピッ

ピッ!!

ぎゅ

たぷ!!

ぬぬ!!

くゅ!!

「あ……い……あっあー!!」

ん!!

あっ♡

ぐっ
ぐっ!!

「!んっ……あっ!」

「あは……出てる……また……
主の精液……こんなに……!」

ドク
ドク!!

ん

ん!!

んっ
んっ!!

ん
ん!!

ドク

ドク!!

「…ふふ、私…また主の精液でどろどろ…
またきれいにしなきゃ…んっちゅるっ…」

はあ

はあ

「…なんかずっと俺、
お前にイカされてるよな…ずっと
俺がしてもらってばかりだ…
なんか悪いな…」

「ううん…そんなことない…
私は主に奉仕できて
幸せ…主が満足してくれるなら
それでいい…それに…」

「……？」

「私には…気持ち良いのとか
…分からないから…」

「………」

「はあ…はあ…また気絶しそうになった…」

ビクッ
ビクッ

ビクッ
ビクッ

ぬゅゅ

トロ

その時のヘルの言葉がずっと俺の心の奥に突き刺さっていた……
それから俺は何かモヤモヤするものを抱えるようになった……

それからしばらく経ったある日の夜、俺は用事があったてヘルの部屋に向かっていた 部屋に着いてノックをしようとすると思が少し開いているのに気づいた その時

「ん……」

聞こえてきたヘルの声に思わず俺は部屋を覗いてしまった……すると

「……！」

「ふ……ん……んふ……んっ」

「……!」

「あ……はあ……ん……んふっ」

はあ

はあ

「あ、あれって……あれ……してるんだよね……
あいつ……あんなことするのか……?」

「やあ……んっあん……はあ……」

「……」

ちゅ、ちゅ、
ぬちゅ

ぴゅ

ぴゅ

「…い、いや…まずい！ これは覗きだ
変態行為だ…あ、後で出直そう…！」

「ん…あつ主…！」

「……！」

「はあ…ああ主…主い…！」

「…あいつ、俺で…してるのか…？」

「ん…ふあ…あつ主…もつと…！」



「んあ……あつ……そこ……んっ……んうう」

（……待てよ……
死神って性的快楽は感じないはずじゃ……？）

「あん……はあ……もつと……ん……主い……」

（いや……相手からの影響をまったく受けないから
セックスしても感じることはないけど
自分からすれば大丈夫なのか……）

「はあん……んああ……！」

（……初めて見る……感じているあいつの顔……）

物静かな普段とのギャップもあってその表情はとても刺激的だった……



「ん…ふあ…あくっ…んっんっ！
…ああ…だめ…こんなのじゃ…」

(……………えっ?)

「はあ…はあ…足りない…全然
もっと…主みたいに…」

『……………』

「はあ…んっ…主…いつも気持ちよさそう…
ん…んっ…あぁっ！」



「はあ……んっ!……ん!……私も……あんな風に……あつ
イキたい……主と一緒の気持ちよく……なり……たい……んっ!」

(……)

「なんで……なんで私は
こんな体なの……んっ……んあつ
いや……いやあ……ああ!」

(……ヘル……)

「はあ……ん……あつもう……少し……んっ!」





「はあああ……主……助けてえ……！」
主……んっ……あっ……一緒にい……ん！」

「ふあ！ ああ！ …主…主…
主いっ!!」



「あっ！……んはあ……んっ……ああっ！」

「くあっ……あっ……んんっ！」

「はあ……はあ……ん……ああ……
はあはあ……ちよとイケ……た……」



「はあ……はあ……ああ……でも……足りない……こんなのじゃ……
はあ……はあ……」

「んっ……主……切ない……切ないよお……
主……」

（……ヘル……！）



俺は堪らず走り出してた……

情けなくて、居た堪れなくなって、申し訳なくて、悔しくて……

「……ヘル　お前はずっとあんな気持ちで……！」

気が付くと俺は館を飛び出し近くの森の中を彷徨っていた……

「……惨めだ……」

俺達は戦場では間違いなく戦友だ、言葉を交わさずとも……いや目を見なくても互いの想いが伝わる……背中を預け命を託すことができる……でも恋人としては……俺はまったくの役立たずだ……いつも俺が満たされる側……俺は……ヘルスの男としてまったく不釣り合いだ……

「くそ……!」

……俺は行き場の無い感情を近くの大木にぶつけた……そんなことしかできなかった……

「……ヘルは俺なんかといて幸せなのか……?」
俺はあいつを満たしてやることはできないのか……?」

「……私が力になるうか? 悩める青年よ……」

「……え?」

「!?」

「ふふふ……こんばんは、月が綺麗な夜だね……」

「な、なんだ貴様は……!?」

（悪魔……!? なんてこんなところに……!?）

「おっと、落ち着いてくれたまえ……私は見てくれこそ怪しいが その実おおそ無害な男だ
名は「アビス・ピット」……言っておくと君がいつも相手をしている悪魔達とは同類ではない……
私は異次元から来た……次元を旅するものだ……」



「……い、異次元？……なんだ？何を言っている……？」

「まあ私のことなどどうでもよいさ……それより……」

「く……何が目的だ……貴様……！」

「……今は丸腰だが……やるしかない……」

「君は今、恋人との夜の営みのことで苦悩しているのであらう？」

「……は？」

「君の思考を少し覗かせてもらった……なにやら苦しそうにしているのが見えたのでね……」

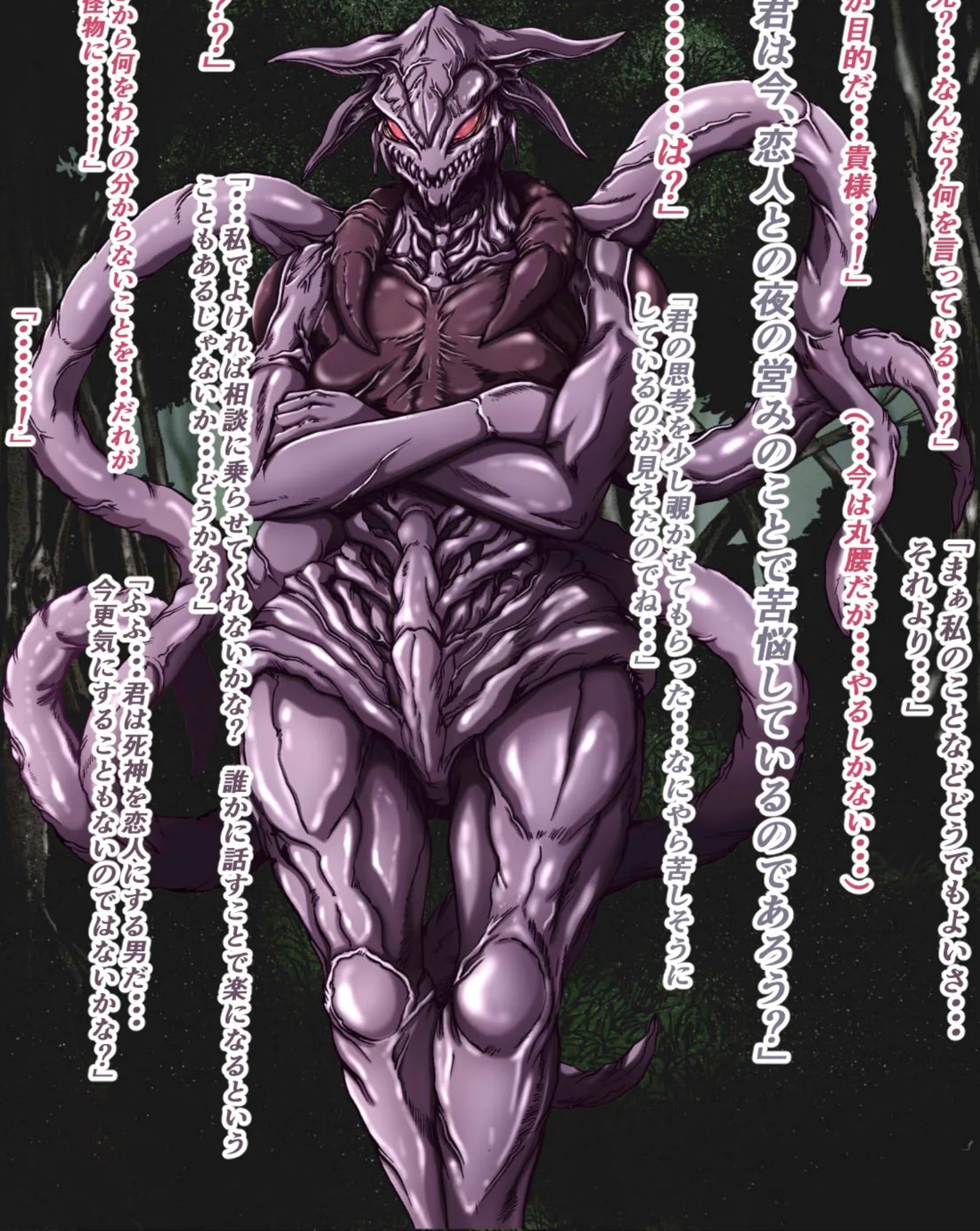
「……？？？？？」

「……私でよければ相談に乗らせてくれないかな？ 誰かに話すことで楽になるということもあるじゃないか……どうかな？」

「……さ、さつきから何をわけの分からないことを……だれが貴様のような怪物に……！」

「……！」

「ふふ……君は死神を恋人にする男だ……今更氣にすることもないのではないかな？」



それからしばらく俺は殺氣立っていたが　しばらくしたらなんとこいつに話を聞いてもらっていた……本当に悪魔ではないようだし　悪い奴でもなさそうだった……というかなんか聞き上手だった……

俺は湧き上がってきた様々な思いを打ち明けた……

こいつ……アビス・ピットは俺の話を親身になって聞いてくれた

言われたとおり　少し楽になったような気がした……

『なるほど……それは歯がゆい話だな……』

『ああ……本当に情けない……男として……』

『……一つある……君が恋人を満足させる方法が……』

『……え？』

『君が私の力の一部を引き継ぐことができれば たとえ相手が死神であつても
快楽を与えることが可能だ……私は全次元随一の床上手だからね……』

『……本当なのか……それ？』

『うむ……しかし……あまり進められる方法ではない
力を引き継ぐといつても軽々しく渡せるものではない……』

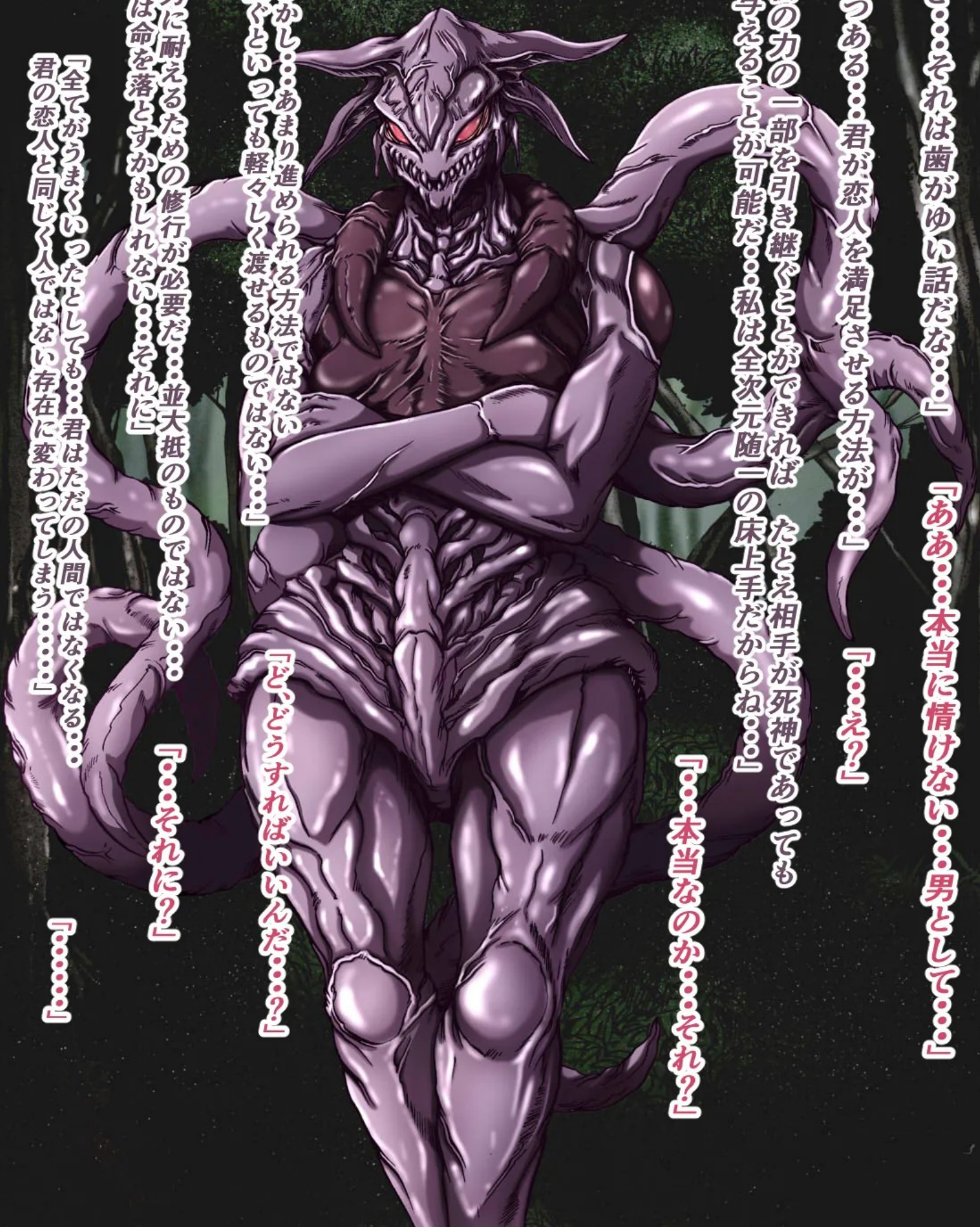
『ど、どうすればいいんだ……？』

『まず私の力に耐えるための修行が必要だ……並大抵のものではない……
その最中君は命を落とすかもしれない……それに』

『……それに？』

『全てがうまくいったとしても……君はただの人間ではなくなる……
君の恋人と同じく人ではない存在に変わってしまう……』

『……』



「……やはりやめておこう……
すまないこんな提案をして……」

「!?……君本気か……?」

「……道は想像以上に
険しいと思ったほうがいい……」

「いや……俺はやる……」

「……ああ……俺はあいつに相応しい男になりたい
恋人として……あいつを満たしてやりたい……!
人間じゃなくなる……?上等だ 俺はあいつのためなら
なんでもする……!」

「ピット……俺の目を見てくれ、俺は本気だ
命をかけた戦いには慣れている……
俺は人間じゃなくなっても あいつの男になりたいんだ!」

「……分かったよ……
私も君のその決意に全力で応えよう……必ず君を
死神をも悦ばせる男に見せる!」

「ああ……よろしく頼む!!」

「……待っていてくれヘル……俺は必ずやり遂げてみせる……!」



それから俺の修行は始まった……それは想像以上に過酷なもので

俺は何度も死にかけた……俺はヘルのことだけを想い耐え続けた……そして

……俺はついにやり遂げた……

死神の聖域に届きうる力を手に入れた……

「……本当に世話になったな……ピット」

「ふふ……早く帰って顔を見せてあげるといい
きつと君を心配しているはずだ」

「そうだな……俺も早くあいつに会いたい」

「またどこかで会おう……その時は
君達のノロケ話を存分に聞かせてくれたまえ……」

「ああ……約束だ……必ずまた会おう！」

俺は握手を交わし異次元から来た友人と別れ、そして走り出した……
あの時とは違い胸を躍らせながら……



『…頑張れよゼルフア君…男は女性を悦ばせてなんぼだからね…』

（さて…私もすぐに帰らなくては…かなりお預けをすることになってしまったから
愛液を垂らして待っているはずだ…私の可愛い肉奴隷達が…）



俺は館に帰ってきた　するとヘルが足早に出迎えてきて俺に抱きついてきた

一応修行の前に　「しばらく留守にする」と伝えてはいたが

何をしているかは教えていないし　会うのも久しぶりだった……

よほど心配をさせていたのだろう

ヘルはやっと不安から解放されたようだった……

思えばこいつと契約してから　こんなに離れ離れになったのは

初めてかもしれない　それほどまでに　ヘルは俺の中で

隣にいて当たり前前の存在になっていたんだ……

「……主、本当に何処で何をしていたんだ？」

「まあ色々だよ……色々あった……」

「だから……」

「ずっとお前のことを考えていた……」

「……え？」

俺はヘルの体に触れる……

「ヘル……抱かせてくれ」

「！……勿論構わない……私も久しぶり主としたい……でも珍しい 主の方から誘ってくるの……」

「かなりご無沙汰だからな……もう我慢できない
じゃあいいか……ヘル……」

「……ん!？」



「ん…ちゅっ!ちゅくっ…ん…れる!…ちゅぶ!」

「んあ…なんか…主…激しい…」

「主…まず何して欲しい?…なんでもしてあげ…」

「いや…俺からさせてくれ…今日は俺がお前に色々
してやりたいんだ…」

「え…?でも私は…」

「いいから…」

「…主…なんか変…んっ?」



「ん……んっ……主……積極的……
そんなに溜まってるの……？」

「……ヘル……おまえやつぱり良い女だな……
こんなエロい体して……」

ドキドキ

「ふふ……私のおっぱい……
……そんなに好き？……いいよ
主の好きにして……」

「ああ……じゃあお言葉に甘えて……」

そう言っただけで俺は修行で得た力を
解放した……

もみもみ

たぶんの

もみ

ぎゅ

「んっ……!?」

「ん……んっえ……?ん……んんっ?」

「……どうした、ヘル?」

「え……いや……んっ……
なんか……変……」

ぢゅっ

たぶっ

もじ

ピッ

んっ

おに

もみ

もじ

「く……んくっ……あつ
なんか……体……ムズムズする……
何……この感じ……?」

「や……ん……あつ……」



「あん…んっあっ…はあ…あ…主…何をしたの…？私…変
胸…ピリピリして…熱くなつてきた…ん…はあはあ…」

「…お前は今感じてるんだよ…ヘル…」

「うん…はあ、はあ
なん…で？…そんなこ
あるわけ…あつ！」

「…もつとよく見せてくれ…
おまえのいやらしい胸…」

「はあ…はあ…あつ…
主…」



「はあ...はあ...あつ...」

ドキ
ドキ

ふー...

ズク...

「...綺麗だ、ヘル...」

ふるん...

もじ

「あ、主...私、なんか...変...

恥ずかしくて
ドキドキする...
今までもいっぱい
見られてるのに...」

ぴん

ぴん

「さあ...ここからだ、いっぱい
感じさせてやるからな...ヘル...」

「あ、主...私...なんか...」

もじ

「!!きやあ……ん……あっ!」

「んあ……あっ……やんっ……んっ!
そ、そこは……はあ……あっ何……これえ……っ!」

「……乳首……硬くなってきたぞ……
乳首弄られるの気持ちいいのか、ヘル?」

「え?はあ……あんっ……分からない……こんなの……初めて……
私……んっ……どうしちゃったの……?」

「んっあっ!はあ……主の手……
すごい……いやらしい……あんっあっ!」



「ひゃあっ!! あっ……んああっ!!」

「あっ……おっ……ちよっ……待つ……あんっ
きゃっ……!」

「ヘル……濡れてるな……お前今
感じてるんだよ……聞こえるだろ
この音……」

ビク!!

ビク!!

ふるん!!

ビク!!

ビク!!

ぢゅ

ぢゅん♡
ぢゅん♡

「はあ……んっんあっ……」

なに……これっ!

……こんなの……知らない

……あっ……私の

身体……ビクビクって

跳ねてる……!」

ブルん!!

たぽん!

「あっ……やあ……気持ち良い……私……本当に
主にされて……感じられてる……!」

「そうだ……そうだよ
ヘル……」

「はあ……ああ……違う……自分で触るのと
全然……あっ!……あっ主……そこお……っ!」

ビク!!

「はあ……はあ……あつ!?……なんか……あつ……私の……アソコ……熱くなって……んっあつ……これ……!」

「ああ……俺にも伝わってきてる……お前のここ……ビクビクしてる……イカせてやる……初めて俺から……!」

「はあ……ああ私が……主に……?んっ……いやあ……と、止まらない……来る……これっ来ちゃう……あつ!!」

「イケっ!ヘル……俺の手でイッテクれ……!」

「んーっいやっあつ!あつくる……主……っ主……っ……いいっああつ!!」





「あ……はあ、はあ……ああ……」

「……やった……初めて俺がヘルを……イカせた……
無駄じゃなかった……全部……どうだった？ヘル……」

「はあ……はあ……
す……すごい……気持ちよかった……
これが……本当の絶頂なの……？
こんなの……初めてえ……」

「そうか……そうか……！」

ドキドキ♡

ぎゅんぎゅん♡

はあ

はあ

「……私……本当に主に
イカせてもらえたの……？
夢じゃない……？」

「はあ……ああ……主……」

「何言ってるんだ……まだまだこんなもんじゃないぞ……
いっぱいしてやるからな……今までしてやれなかった分全部……」

「行くぞ……ベッドに……」

ガッ

トク

ガッ

「はあ、はあ...主...
恥ずかしい...こんな
格好...」

「よく見せてくれ...
ヘルのご...」

「あ、主...顔近い...
そんなにじつと見ないで...」

「綺麗だ...それに
さっきので濡れてて
ビクついててめちゃくちゃ
エロい...」

「いや...そんな...あつ主の
息が当たって...そこ...
くすぐりたい...」

「触ってもいいよな、ヘル...」

「うん...すぐドキドキする
...」



「んん…!!」

「んっ…あんっ…
んっ…やあ…あんっ」

「どうだ…
ヘル…?」

「す、すごい…感じちゃう…
んっ…触られるたびに
…アソコ
ビクビクして…
腰浮いちゃう…っ」

「んん…
んん…
んん…」

「おお…俺の指に自分から
絡みついてくる…
すごいな死神のここ…
俺もメチャクチャ
イカされまくったからな…」

「ひゃん…そ、そんなこと…
言わない…でえ…んんっ!」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「んん…」

「あん……やあつ……だから
はあ……言わないでえ……」

「?なんだそれ?」



「…何をバカなことを…俺が浮気でもしてたっていうのか？」

「ん……だって……」

「そんなこと言ってる…」



「っ!!はあっ……んああっ!!」

「あん……やあ……ああ……
だめえ……そんなんっ……んくっ
ひやあっ!!」

「んちゅ……俺にはおまえだけだよ
……ヘル、俺はお前のためだけに
この力を手に入れたんだ……」

「んく……ああっ……あっ
そこお……っ!!」

「お前の心配するようなことな
何もない……後でちゃんと説明するから
今は何も考えず
ただ気持ちよくなってくれ……」

「あっ……あふ……んっあ、主……ん
んやあっ……あんっ!!」



「はあはあ…あんっやあ…
気持ちいい…主のペロ…
…私の気持ちいとこばっかり
…舐めてくるう…っ!」

「はあ…あっお汁溢れて
止まらない…よお
あっ!主…激しい…!
主に舐めてもらうの…
気持ちいいっ
…!」

「んっあっ…主…あっ
気持ち良くて…頭がぼーっと
してきたあ…んあ…ああっ」

「まだまだだぞ…お前のこころもって
可愛がつてやる…!」





「あっ! あっ! 気持ちいい...っ!
主の手...すごい...!
アッゴ、ビクビクしてる...
これ...また来ちゃうう...!」

「いいぞ...イッてくれ...
ヘル...俺の手で感じてくれ!」

「ああっ...そんな...
もつと激しくなんて...
...あつそこつそこつ...!
あつくるっ
だめ...止まらない...!」

ちやん!!

「んあっあつ...! イクっあつ
だめえ...っ!」

「あんっやつ! あつくる... イッあ...んああ...っ!!





「…俺のも今までにないくらいガチガチだ…
もう我慢できない…挿れるぞ…ヘル」

「はあはあ…なんか…
怖い…初めてじゃないのに
…どうなっちゃうか…自分でも
全然分らない…」

「こんな風に俺からするのは
初めてかもな
…いっぱい気持ちよくして
やるからな…
いくぞ…」

「はあ…はあ…主のすごい硬いモノがアソコに
当たってる…のいよ…来て…主…」









「んっ!? あっ
ああ...!!」

「あっ! あふっ...んっ
あっ...なに...これえ!?
やあ...はあっ!!」

「はあはあ...ヘル
感じるか...!」

「んおっ...おおっ!
待っ...激しすぎ...!
んあっ...あっおほっおっ!」

「あくっ...んあっあっ...
主の...届いてる...ふあっ
私の中...一番奥まで...!!」

「あつあつ...だめっ!すごつ...あつ
すこいい...っ!こんなの...知らない...!!」

「やん...くっあう!...はあ
気持ち...良いっ!...
ああつ気持ちいいよおつ!!」

「はあ...ああつーんあつ!
あ、主ので突かれるたびに...
アソコ...感じすぎて
身体...ビクンビクンって
しちゃう...!!」

「くっ...感じてるの分かるぞ...ヘルのこめ
めちやくちや動いて...締め付けてくる...っ!!」







「お...っあつあつ...主と...一緒にい...?」

「そうだよ...
やっとなん達は一緒に
気持ちよくなれるんだよ...!」

「はあはあ...あつ本当...?
んっあつ...イキたい...主と
一緒に気持ちよく...ないたいっ!!」

「よし...イクぞ...
このままっ!」

「はああんっ...あつ! 激しいっ
そんな...深くまで...んおっ
あつ...ああつ!!」







「あつ...はあ...んっあ...はあ...」

「あふ...うっあ...はあはあす...すごい...
...んあ...なに...今のお...」

「はあはあイッた...?」
今...私...
す、すごすぎる...これが...
本当の絶頂...なの...?」

「...ああそうだ...俺のモノで
おまえはイっただよ...!」

「はあ...ああ...やつと主と一緒に...
...すごい...私の中
主の...いっばい...
体中痺れて...気持ちよかったあ...」

「はあはあ...こんなもんで
満足してもらっちゃ困そうだから
まだ始まったばかりなんだからな
...」

「ふえ...?まだできるの...主?」

「はあはあ…あ、主…恥ずかしい…こんな格好…」

「そ、それにちよつと休ませてほしい…私こんな風になったの…初めてだから…身体が…」

「いい眺めだぞ…ヘル」

はあ

ん

はあ

ん

「おまえも前は俺を休ませてくれなかっただろ？俺がぶつ倒れるまで 何回もイカせられたっけなあ…」

「そ、それはそうだけど…主…意地悪…」

「思う存分やり返させてもらうぞ…」

ん

ん

ん

ん

ん

「!!あぁっ……ひゃぁっあぁっ……んぁっ!!」

「待つ……あっいきなり……そんなぁ……あっ!!」

「さっき……イッた……ばっかりなのにい……
まだ……私のアソコ……痺れて
敏感なままなのぉ……っ!!」

「んぁっおおっあぁっ……あぁ……だめ……っこれ……
身体……弾けるぅ!!」



「んぎっ…ひっんっ!…んいっ…んくっ!」

「はあはあ、後ろから突かれるのはどうだ…ヘルっ!」

「んくっ…あっ…き、気持ちいい…
は、激しくて…突かれるたびに主のが…
私の奥に当たってえ…!!」

「はあ…あくっあっ…すごい…これえ…あっ!

感じすぎるう…待つて…こんなのまた…

すぐに…イっちゃう…ツイっちゃうからあ…ああ!!」



「いいぞ...好きなだけイッてくれ...
何度でもぶち込んでやるから...!!」

「おおっ!? おっ!...ああっ!...そんな...深い!!」

ぐぐぐ!!♡

ぐぐぐ!!♡

ぐぐぐ!!

ぐぐぐ!!

ぐぐぐ!!

ぐぐぐ!!

ぐぐぐ!!

「あつあつ...これ...無理...すごお...!んっあつ本当に...
あつ来るつまたすごいの...きちゃうう...!!」

「おほっ! おっ...だめ...止まらな...っひあつ
あつ...ひつくるっ! イクッ...イクイクッあつ...!!」

「すげえ……ヘルのごっこ……波打ちまくって……！」

「んああ……すごおい……！ひつあつまだ……イツ……あつ……ああ……っ!!」



「はあはあ……ああ……んっぐすっ……主い……私、また
イッちゃった……あぐっ」

「ああ……でもまだこのまま続けるぞ……
俺はまだ出してないしな」

はら

はーっ

んお んお

あ

は

「……ま、待って……主……本当にちよつと休ませて……
これ以上は本当に……私、変になっちゃうからあ……」

「それでいいんだよ……ぶっ倒れるまで
イキ狂わせてやるからなヘル！」

「嘘……！やめ……あっ主……んっひゃあっ！」

ビクッ

ビクッ

んる、
んっ!!

んる、
んる♡

「おつ…あつだめ…これ…本当に…
さっきの…まだイツてる…からっあつ
はあっ!!」

「んぎいっ! ひぐっあっ!...むりい...こんなの...
むり...!! 耐えられないい...アソコ...壊れちゃうう...!!」

「あひっおっおおっ!...だめっ...あつすごっお...
気持ちよすぎるうっ♡!!」



「くっあ…俺もそろそろだ…中にたっぷり出してやるぞ…ヘルっ！」

「はーっあーっあつ…！あつ…だめえ…そんな、そんなの…また…イツちゃうう…っ♡!!」

「私の…アソコ…主の精液…喜びすぎちゃう…中出しされたら…何度でもイツちゃうよお…♡!!」

「う…っ出すぞっ!!」

「はあ!あっあつ…!くる…また…すごいのっあっあつだめ…イクイクっイク…あーっ♡!!」





「あつあつ……!はああつ……あぐつ……ああ……
しゅごい……♡あつ!」

「あ……いやあ……!あ……止まらない……
ひっぐすっ……うう……」

「主……ごめんなさい……気持ちよすぎて……
私……お漏らし……しちやつたあ……」

「かまわない……いや、嬉しい……
それだけ感じてくれたってことだろう?
さあ続けるぞ……もっといっぱい
このまま全部ぶちまけてくれ……ヘル」

「はあはあ……主……私、もう何も考えられない……
何も分らないのお……」



「ああっ! あっ! はあんあっ...!!
んああ...はあ...もう
だめっだめえ...っ!!」

「はあ...んあつまた...
こんな激し...あっ! おおっ!
本当にもう...無理...限界い...っ!!」

ズン
おふん

ズン
おふん

「あんっあっ!...主い...もうやめてえ...もう
これ以上されたらあ...あっんああ...っ!!」

んんん

んんん

んんん

「んぐっふっ…なんでこんなに…気持ち良いのお…っ!」
 こんな…耐えられるわけない…っ!!」

「はあっああっ！こんなの……私……
またイツちゃう……ずっと……
主に挿れられるたびに
何回でもイツちゃう……!!」

「んあっふーっふーっ……あくっ……気持ちよくなりすぎて……変になるっ……頭おかしくなっちゃう……っ!!」

「!!んぎっくんっくんっ!んあつまた...来るう...
すごい来ちゃう...こんなすぐにい...
これっ私...またイッちゃう...っ♡!!」

「いいぞ...イッてくれ...ヘルっ!!」

「んあつまつ...無理...むりむりい!!こんな...
あつまつできない...頭...真っ白に...!主のペニス...
...気持ち良すぎるう...!あつまあ♡!!」

「あつま!だめだめだめっ!くるっんあつま止まらない
あつまだめ...もう...イクイクイクッんっ♡!!」





「おっおっ！おほお…おおっ!!すっ…
しゅごい…気持ちいい…
気持ち良いい…!!」

「はあはあ…すごい顔してるぞヘル…
おまえがそんな顔してくれるなんて…」

「ほっ…おおっ…セックス気持ちいい…主のペニス…
チ○ポ…オチ○ポ気持ちよすぎるうう…!!」

「はあはああ…だってこんなの
気持ちよすぎて…正気保てないい…♡」



「もつと気持ちよくなってくれ…っ！
見せてくれ…お前のアへ顔…っ!!」

「ほっ！んおっおおっ！……もう……あっ！何も分からない……
オチ○ポとオマ○コのことしか……考えられないい……♡!!

「あふ……つあつ！またイク……ッもう私……何されても
イツちゃう……来るっ！しゅごいのきちちゃう……んっあつ
ああっ♡!!!」

「イク…イキましゅっ…あっおほっんあっ…
イクイクツイクツはあ…っ♡!!!」



「あっ！ああっ！気持ちいい……！いいよおんあつまた……おしっこでちゃううっ♡!!」

ん「はあはあ……まだまだ、まだまだぞ
……ヘルっ!!」

「あっあっ死ぬ……ひぬっ！……私絶対
イキすぎてひんじやう……っ♡!!」

それから数時間後！

「はあはあ……ヘル……ヘルっ!!」

「あーっ! あーっ! おっおっ! ……いい……ぎもちいいっ!!
オチ○ポ……しゅごいっ……チ○ポ……オチ○ポお……っ♡!!」

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

10%

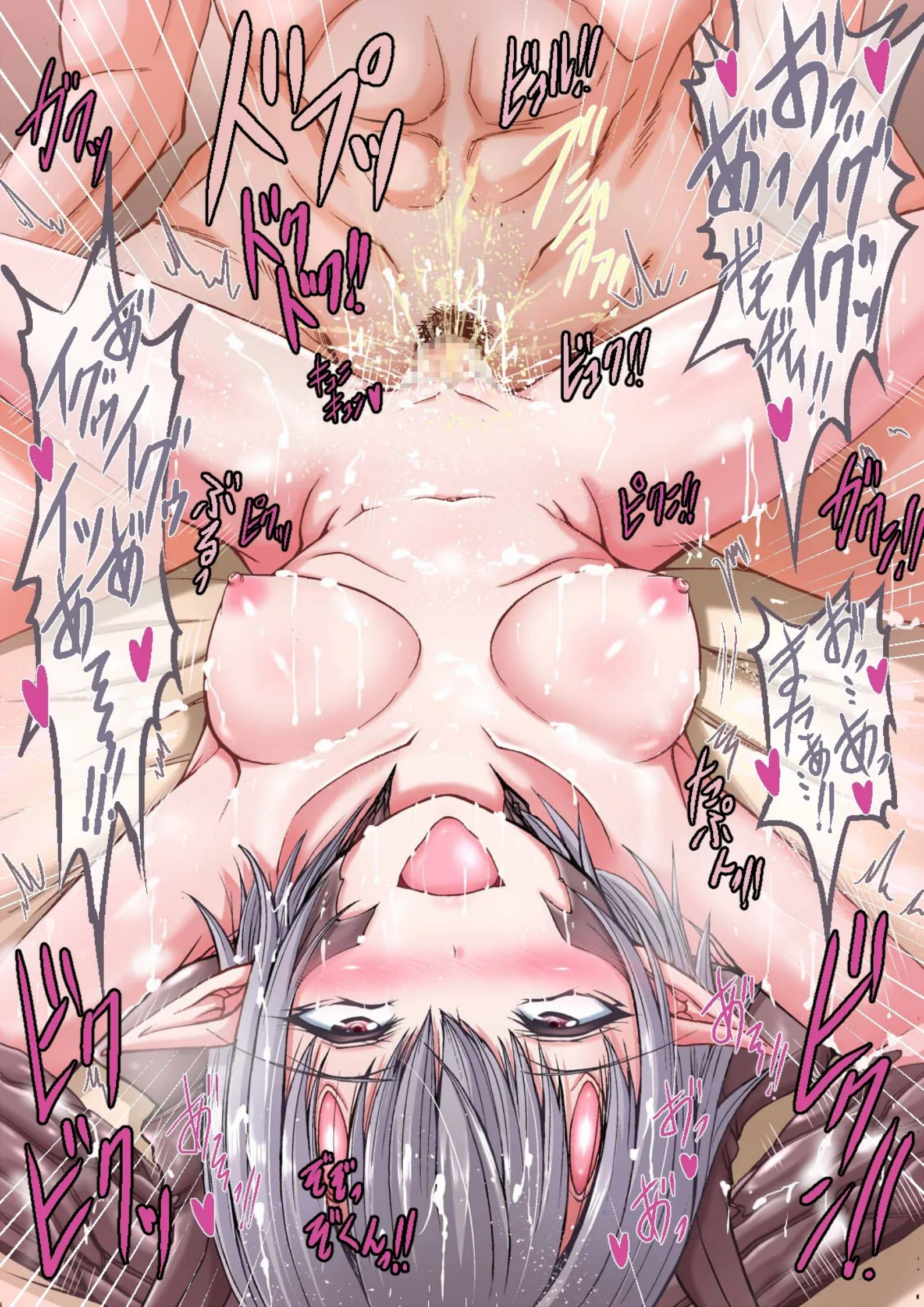
10%

「あっおっ! おほお……んあっ……あるじい……
あっきもち……ぎもちいいっ……いいっ
ひぬ……ひぬっ……ひんじやうう♡!!」

「あっ! また……またくる! きちやうのおっ!!
もう……ずっとイッで……あっあっあ……っ!!
イグッ! イグッ! ……イグウ♡!!!」

10%





「あ……あ……ある……じい……あっ♡♡」

「……」

「はあはあ……ヘル……ん？」

「……気絶したのか……」

「……なれたんだ……俺はやっと
ちゃんとしたおまえの恋人に……
お前に相応しい男に……」

「よかった……人間じゃなくなったけど……
これでお前と愛し合うことができる……
生き残ろう……ヘル、俺達はいつまでも……ずっと一緒だ……」



ピュッ / ムンムン ムンムン ムンムン

ガッ

ガッ

ピュッ

ピュッ

ピュッ

プン

おっ

おっ

はあ♡

ピュッ!!

♡ ピュッ♡

ピュッ
ピュッ

おっ

♡

その後俺は目を覚ましたヘルに

自分に何があったのか全てを話した……

ヘルは驚き、俺のやった無茶を咎めもした……でも

それでも最後には笑って喜んでくれた……

それから俺達は今まで以上に求め合った

女の悦びを知ったヘルは快感を求め続け、やがて

快楽の虜となり堕ちていった……

また戦いを終えたある日

「はあはあ……主……早くう……」

「ふふ……何をしてほしいんだヘル？」

「ん……いやあ……意地悪しないで……チ○ポ……早く……早く主のチ○ポちようだあい……♡」

「ははは……っ

なんかすっかり淫乱になっちまったなあ……ヘル」

「うん……私、もう不可神なんかじゃない……ただの淫乱死神……今日戦ってる時もこれが終わったら主にオチ○ポ挿れてもらえる……ってそんなことばっかり考えてたの……だから……主い……お願い……」

「分かってるよ……ちゃんご褒美あげるからな……」

そう言っつて俺はズボンのチャックを下げた……



「あ……♡チ○ポ……主のオチ○ポお……♡」

「俺のも、もうガチガチだ……」

「はあはあ……ああ♡……だめ……主のオチ○ポ……エッチすぎる……
見てるだけで……オマ○コ……きゅんきゅんしてきちゃう……♡」

「はあはあ……ねえ、主のオチ○ポ……舐めていい？
ぺろぺろしたいの……ねえいいでしょう？」

「ああ……気持ちよくしてくれ……ヘル……」

「はあはあ……あつ……主……♡」



「はあはあ...ああ♡
チ○ポ...主の勃起チンポお...♡」

「はあ...んあ...この匂い...だめえ...
これ嗅ぐと「頭の中...熱くなつて
真っ白になっちゃう...」

ドキ
ドキ

はあ♡

「興奮しすぎだ...息が荒くて
当たって...くすぐりたい...」

ぴん

はあ♡
れろ
く
く

「はあはあ...もう我慢でない...いただきまあす♡
んっれる...ちゅぶっちゅつくちゅ...んちゅっ」

「んじゅ...れる...ちゅびっちゅつれる...ちゅっ♡」

「はあ...ああ...れる...んじゅ...ぷちゅっじゅくっ
れるれる...ちゅっ...んちゅっ...ちろっ...ちゅぶっ♡」

「んあ...ちゅるっ...
ぺちゅっちゅっ...
んっ...やっぱり美味しい...
この味...大好きい...♡」

「れるっ...ちゅっじゅるるっ...はあはあち○ポ...
私を女に変えてくれた...主のオチ○ポお...っ
ちゅるっちゅぶっちゅくっ♡」

「はあはあ...いっぱい気持ちよくするから...
主のオチ○ポもっとうち合わせでえ...んっあむっ♡」



「んっぐぶっじゅぶっ!あむっんちゅっ
がぼっぐぶっ!じゅぶぶっじゅずっじゅっ♡!!」

「おお...っ!」

ビッ
ビッ

ふー

ふー

ぐぐぐ!!

ぐぐぐ
ぐぐぐ

ん

「んっんふーっ!んっじゅりゅりゅっ
んちゅ...ぐぶっ
ちゅぶっくちゅっ...んっ
あふっ...んぶっじゅずっ♡!!」

んふふ!!

んち!!

「...お、お前のテクも...前よりすごくなってるよな...
なあ「発出しちまっていいか...ヘル?」

「んじゅっ...んっ...んぶっちゅっ...んふ...
んちゅっ...ちようらあ...ああひの...んっ
せいへきい...んっぐぶっちゅっ...じゅるるっじゅばっ♡!!」

「んっちゅっ！ちゅぶっ…じゅりゅりゅっ！
んふっ…びくびく…んっ…だひて…！
いっばいきもひよくなつて…あるひい…っ！
がぼっぐじゅじゅっじゅぶっ！じゅるるっじゅりゅっ♡！！」

「う…だ、出さぞ…ヘルっ！！」

「んっ！ぐぶっ！…ちゅるっ！ぐじゅっ！
ちようらい…んっあるひの…チ○ボミルク…！
わたひのくちに…んっじゅぶっじゅりゅっ♡！！」

「んっ…っ！！」

「がぼっ！じゅぶっ！じゅぶっ…ちゅっじゅぶっ…んっ♡！！」





「ふはあ…あつんあ…はあはあれる…
主のチ○ポミルク…いっぱあい♡」

ドキ
ドキ

「れる…あむっ…ぺるっ
ちゅぶっ…ごくっ
はあはあ…美味しい♡
…ちゅるっ！」

「マジでエロいな…この眺め…」

「はあはあ…んちゅちゅるっ…
全部…舐める…主の精液…
みんな私だけのものお…ちゅるちゅる
あむ…くちゅっごっ♡」

あふ

ビュッ
ビュッ
あふ
あふ



「んちゅ…つずちゅ!つちゅーつちゅーつ…んつ
主の…硬いまま…んつちゅっ♡」

「もっとしてくれるんだろ…ヘル？」

ドキ♡ ドキ♡

ん♡

ふーっ

「うん…いいよ♡…もつとする…
もつと主のチ○ポミルク欲しい…あむっ
んふっくちゅ…っ♡」

れる

ふーっ

はあ

トク…

ふーっ
んふっ
んふっ

ピッ

ピッ

「おおっ…この掃除フェラからの二回目…
イッたあとの敏感なモノを舐められるのが良いんだよな…」

「ふふ…♡んちゅつれるっーじゅるるっちゅぶっ!
んふ…っふーっんつちゅるっちゅっ♡!!」





「んぶっじゅっ...!だひてっいっばいだひてっ♡!!
あるひのチ○ポミルクで...わたひの...口も
顔も...全部...どろどろにひてえ...♡!!」

「うっ...出るっ...
ヘル...受けめてくれ!!」

「んっ...♡...♡...♡...またくる...♡!!
んっじゅぶっ...チ○ポ...チ○ポッ...
ちゅっんっふっじゅぶっふっじゅん...♡!
んっ♡!!」

ビクビク!!

ズッ

ふっ♡!!

ビクビク

じゅぶ

じゅ

くちゅ

ふっ♡!!
んっ♡

く♡
ぐん♡!!

ズッ!!



「はあ...ああ...♡あむっちゅつれる...ごっつ♡
主の精液...いっぱい...しあわせえ...
んっれる...ちゅびっ♡」

ドキ

はあ♡
はあ♡

はーっ

はー♡
はー♡

はー♡
はー♡

ドキ

はあ♡
はあ♡

「はあはあ...むちやくちや
よかったよ...
じゃあ次は俺の番だ...
俺も負けてられないな...」

ビク!!

はー♡
はー♡

はー♡
はー♡

「ん...ごっちゅぶっ...
はあはあ...何い?
主...何してくれるの...?」

ビク!!

「まあ...期待してくれよ...
いっぱい気持ちよくしてやるから...」

「はあはあ...ああ、早く...早く...
主...♡」

「はあはあ…主い…何これえ…」

「思った通りいいなこれ…
最強の死神…不可神の目隠しプレイ…
ぞくぞくしてくる…」

「はあ、ああ…私も…
こんな感覚初めて…
すごくドキドキする…」

「そうかそうか…
そう言っただけは
ヘルに体にとっ触れる

「んっ」

たんたん

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「ひゃんっ♡!!」

「くく…どうした、ヘル？」

「あゝ」

「あ、主が…いきなり触るからあ…んっ♡!!」





「んにゃあつ!!...あつんあつ...あつ♡!
そんな...いきなりい...ふああつ♡!!」

「本当だ...ヘルのこ
すこい...
漏らしたみたいにな
ってる...」

「クリもすごい硬くなってる...」

「んあつあつ...
恥ずかしい...んっ!
やあ...そこっクリ...っ!
あつだめえ...♡!」

「はあんあ...だめ...そんなに弄っちゃ...
んあつあつ...んっあつこれ...きちゃ...
きちゃううっ♡!!」





「ああっ! あっ!...! 激しいっ!
んあっはあ! いいっ!... 気持ちいいっ
主の指... 気持ちいい!...っ♡!!」

「んはあっあっ! やあ... あっ
イカせて... んっやん...
主!... 気持ちよくしてえっ♡!!」

「はっああっあっ!... くる...
きちゃう... オマ○ンコ... びくびくして
... あっイク... イクッ... あっ!...♡!!」

「……はあはあ……え？
なん……で……？」

「どうしたんだ……ヘル？」

「いやあ……なん……で
イカせてくれないのお……？」

「くく……お預けてやつだよ……お前もよく
俺にやつてただろ？」

「んあ……ああ……そんなあ……あつ
指入れたまま動かさないの……
オマ○コむずむずしちゃうう……
お願いい意地悪しないでえ……」

「ちゃんとおねだりできたら
最後までしてやるぞ……ほら」

「はあはあ……はい……おねだりするう……っ
イカせてえ……主の指で私のオマ○コ……
いっぱい気持ちよくしてえ……っ♡!!!」

「よくできたな……いいぞ、
腰がガクガクになるぐらい
イカせてやるよっ!!!」





「んあっああっ!きたあ...っ!あつ
すこ...っ激しい...!!
いいっ!気持ちいいっ♡
あんっ...そんな奥までえ...っ♡!!」

「いやらしくおねだりなんかして...
見えない状態でされるのがそんなに
気持ちいいのか...!!?
本当に淫乱になったな
ヘルっ!!」

「あーっあーっ!そうなのお...私...
淫乱になっちゃったのお...
...目隠しされて主にオマ○ンコ弄られるの
気持ちよくて堪らないのお...っ♡!!」

「んあっ...はあんっ...気持ちよくて...
腰、勝手に動いちゃうううっ...
んっ!やあんっ♡!!」





「はあはあ...あッあッ...いいっ
気持ちいい...♡」

「...よし、じゃあ...そろそろ目隠し
取るぞ...目、気をつけてな...」

「はあはあ……あつ主だあ……♡」

「はは……とろとろだな……
可愛い顔してるぞ、ヘル」

「はあはあ……あは♡……主い……
私……すごいドキドキして……
オマ○コ熱くなつて止まらないの……
……ねえ、チ○ポ……
次は主のチ○ポ……
ちようだい……♡」

ドキ

グッ

ビク

ガク

グッ

グッ

ビク

ガク

ドキ

グッ

「分かったよ……俺も
ヘルに挿れたくて堪らない……」

「はあはあ……早く主い……
私……もう我慢できない……♡」







「あぁっ!! あっ……んっ あっんひいっ♡!!」

「んふっ……うっ……あっ 激し……
あふっ……ん あっー やっばり……主の
チ○ポ……すごい……ひいっ♡!!」

パッ! 10 10

「はあはあ……
ヘルのマ○コもやべえ……
やるたびにエロく
なってるぞ……っ
ドロドロで……熱くて……
チ○コ……溶けそうだ……!」

「はあはあ……
ヘルのマ○コもやべえ……
やるたびにエロく
なってるぞ……っ
ドロドロで……熱くて……
チ○コ……溶けそうだ……!」

ビュッ

ビュッ

んっ♡

んっ♡

ゴッ

ガッガッ

んっ♡

んっ♡

「はあっんあっ……あっ……主のせい……!
主にいつばい可愛がつもらって……エッチに
変えられたの……私のオマ○コ……もう主のオチ○ポ
の形になっちゃってるの……♡!!」



「いいぞ...我慢しなくて...
好きなだけ
イケばいい...っ!」

「あっんおおっ...だめっ私...きちゃうつ!
もうイッちやう...主のチ○ポ...気持ちよすぎて
全然耐えられないい...っんひっああっ♡!!」

「んあっあふっ!くるっあっ...くるくるっ!!
いいっ...あっイクッ...イッあーっ♡!!」







「あひつひつ...ひぎいつ♡!! あっあっ...
きぎもちいい...ッイツたばっかで...ズコバコされるの
しゅきい...ッひつあつ...また...また
私...イツちやうう...♡!!」

「はあはあ...俺も出すぞ...
チ○ボ大好きセックス狂いな
淫乱死神のドスケマ○コに...
たっぶりぶちまけてやる...!!」

「んぎっあッ! あっほしい...出してッ!
主のチ○ボミルク...オマ○コにびゅー
びゅーッで射精されるの...大好きなの
気持ちよすぎてあへあへしちゃうの
っ♡!!!」

「んぎっあッ! あっほしい...出してッ!
主のチ○ボミルク...オマ○コにびゅー
びゅーッで射精されるの...大好きなの
気持ちよすぎてあへあへしちゃうの
っ♡!!!」

「くう...イクッ...出すぞ
ヘルッ!!」

「あっひつ...イクッ私もまたイツちやう...
主に中出しされてイツちやううッ!
あひいッ...イクイクッイツくうッ♡!!!」





「まかせとけ...じゃあ次はこっちの穴を可愛がってやるかな...」

「はあはあ...ふえ...?」

はあ

ドキ

ドキ

「はあはあ...ひゅっ...うん...もっ...もっ...としてほしなの...意識が無くなるくらい...もっ...もっ...イカせて...気持ちよしてえ...♡」

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

「はあはあ...気持ちよかった...けどまだまだ満足してないんだろ...?」

「あっ...あっ...ほお...っ...最高...♡...いい...中出しアクメ...きもち...♡...私の中...主のチ○ポミルクでいっぱい...♡」

「んはああっ!? あ、主...そこ...おしりい...っ!」

「ごっちの処女も俺にくれよ...」

♡
きゅん
きゅん♡

ハ
アッ...

ハ

トク...

アッ...

「く...キツッ...締め付けが
ヤバイ...っ
う、動いていいか、ヘル?」

「はあはあ...ああ...うん...いいよ
ちよっと...変な感じだけど...主の
好きにしていよ...♡」

「よし...なら」

「んあっ...んっああ...っ!
むり...んっ!
は、入ってる...本当に...
主のオチ○ポが...
私のおしりにい...っ!!」

はあ♡

はあ♡

あ♡
ハ



「んあっ!んくっ...あっはあっ...なんか...これ
変な感じ...腰から...何か伝わってきて...
体中が...ぞわぞわする...っ!!」

「くっ...あっ...す、すごい...
マ○コとはまた違う感触だ...っ!!」

ビッ
グッ

グッ
グッ
グッ
グッ

グッ

グッ
グッ

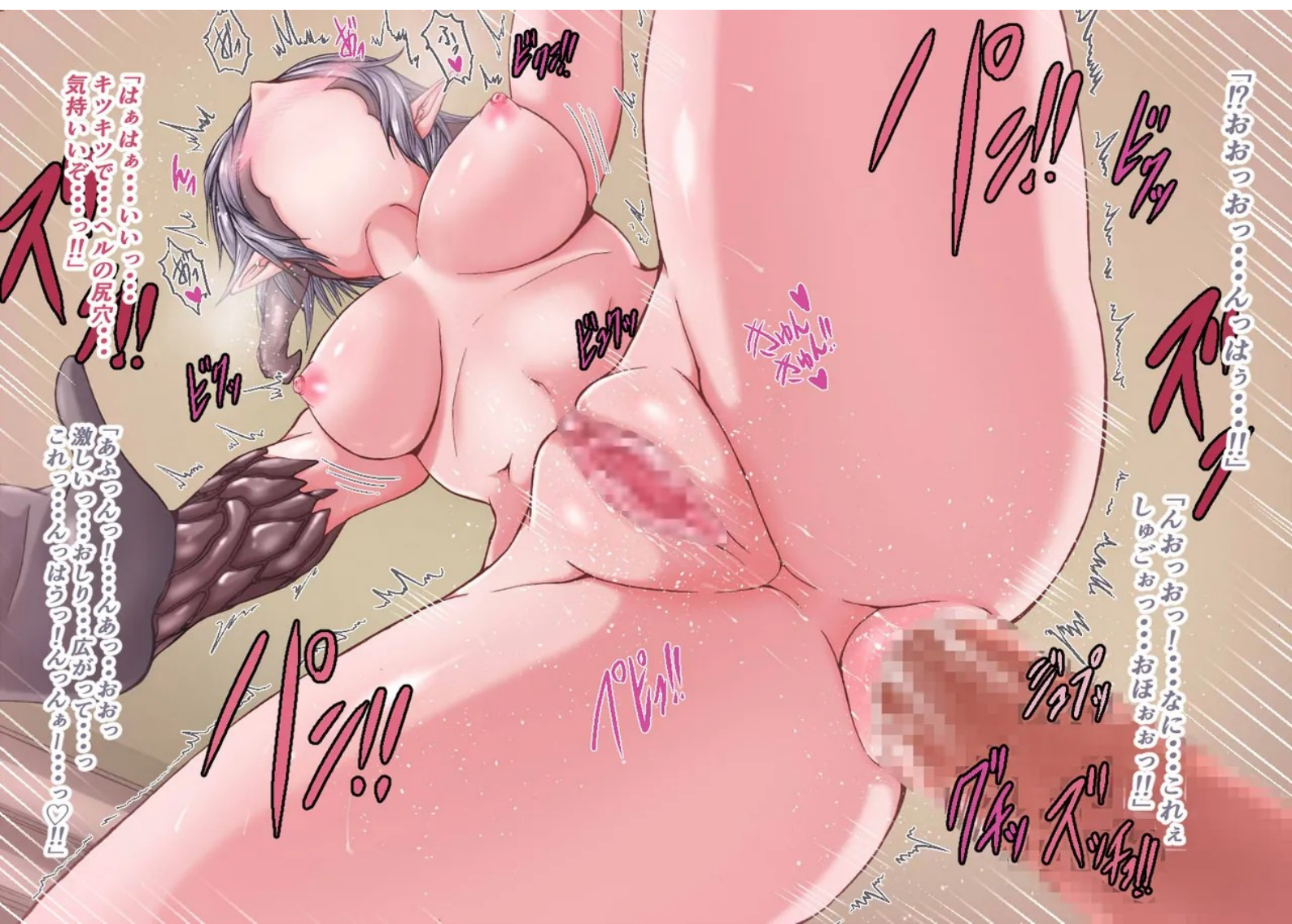
グッ
グッ

グッ
グッ

「はあ...んっ...
お尻の奥で感じる...
主のチ○ポが...
硬くなってるの...っ♡!」

「はあ...ちよつと慣れてきたな...
じゃあ...思いつ切りやらせてもらおうぞ...!」

「ん...あっはあ...
いいよ...いっぱい私の
お尻で気持ちよくなつて...主♡!」



「はあはあおっ…んおっ!でも何か…これいい…
気持ちよく…なってきたあ…んあつはあっ♡!!」

「…ヘル、愛液出まくってるぞ…
もうアナルで感じるようになるなんて
…流石淫乱死神だな…っ!」

「んあっ!あはあっ!あつんあ…っ
お尻…どんどん熱くなって…オマ○コも
キュンキュンしてきたあ…あつはあ
気持ちいい…お尻気持ちいいっ♡!!」







「おほっ！んほおっおおっ♡！！いい...
気持ちいいっ...お尻きもちいい...うっ！！
んああっあっ！これ...っ止まらない...
きちやう...お尻でイッちゃうう...っ♡！！」

「いいぞ...！尻穴でイッてくれ
...ヘルっ！！」
「んあっ！あっあひい...こんなの...むりっ！
しゅごすぎる...っおじりっおじりい...
ひぎい...！んっんほおっ...んほおおっ♡！！」



「あつくるっ！イクイクッお尻でイッちゃうっ！
主にオチ○ポ、お尻に突っ込まれて…
アナルセックスでいっぱい感じちゃうっ♡！！」

「はあはあ…くっ…俺も限界だ
…尻穴にぶちまけるぞっ！！」

「あつあつ！くるっ…！
お尻に主のチ○ポミルッ…
イクッそんな絶対イッちゃうっ…
アナルアクメしちゃうっ♡！！」

「んあッイクイクっ…んあッ
あつやああッあつまたッ
イククううーっ♡！！」



「はあはあ……むちやくちや
絞り出された……」

「はあはあ……むちやくちや
絞り出された……」

「ああ…俺もだ…じゃあ次はどうしてほしい…？」

「はあはあ
私が主を気持ち
…昔みたい」

「……へえ……それは楽しみだ」

「はあはあんっあ……っこの態勢好き……
主の……一番深いところまで突き刺さるのお……♡」

「はあはあ……なんかあの頃を思い出すな……」

「んっ……うん……
主と初めて繋がったあの夜……っ」

んっ♡

ちゅっ♡

んっ♡

≡4

≡4

んっ♡
んっ♡

んっ♡
んっ♡

「ぶっ倒れるまでおまえにイカされたよな……」

「あの時みたいに……主を気持ちよくさせてあげたいの……
だから……私にさせて……んっあつくっあんっ♡！」

んっ♡

「ああ……気持ちいい……ヘルの腰使いすごくエロい……っ！」

「あっん……う、嬉しい……でも……だめ……っあっ！
これ……感じすぎて……私の方が気持ちよくなつてきちゃう……っ♡!!」

「んくっあっ!…んんっ!…あの頃と違う…
幸せなだけじゃない…主とのセックス…本当に気持ちいい…っ♡!!」

「んあっはう……!ほらっあつまた……すぐきちゃう……っ!
私が……してあげたいのに……主のチ○ポすごすぎて……私
すぐイッちゃうのお……っ♡!!」

「うおっ……すげえ動きだ……っ!」

ぞく♡
ぞくん!!

ズン!!

ビクッ

ズン!!

ビク!!

ズン

ズン!!

ビク
ビク!!

ズン!!

ズン!!

ズン

「んあっあっあっ!腰……勝手に動いちゃう
しゅごいいっ!きもちいいっ……主との
セックス……気持ちよすぎるうっ……っ♡!!」

「ああっイクッイクッまた……イッちゃう……
止まらな……ッあっあっあああーっ♡♡!!!」

んーっ♡!んんっ♡!...イッてる...またあ
...止まらない...私...主のチ○ポで...何度でも...
ずっとなんとなんといふ...♡♡♡!!



「はあはあ俺からもさせてくれよ……!」

7th

ピッ
たぶん!!

ビッビッビッ



♡



「あっおおっんほっおおーっ……一番奥……届いてる……主のチ○ポが私の子宮・叩いてる……っあひっいいっこれっしゅごすぎ……きもちいいっ♡♡!!!」

「ああっ！んああっ♡!!きもちいいっシギモチイイツ♡!!
あっ！あっ！チ○ポチ○ポチ○ポオッ!!
主のオチ○ポ最っ高おおっ♡♡!!!」

「あひっひぎいっ!...私もう完全にチ○ポ中毒の
淫乱ドスケベ変態死神になっちゃったあ...っ!
...もう主のオチ○ポ無しじゃ生きていけないっ♡♡!!!」

「んおっおっおほおっ!...もう...何も考えられない
キモチイイことで頭の中いっぱいになっちゃってるのっ♡♡!!!」



「お、俺だって...お前の体の虜だ...っ出すぞ
しっかり受け止めてくれ...っ!!」

「あっあっ!欲しい...主のチ○ポミルク...
びゅーびゅー中出しされるの気持ちいいのっ
出して...私のオマ○コ...主のでいっぱいにしてえ♡♡!!!」

「んあっあっ!イグイグツイッじゃうっ!
はあっ!あっ!くる...来ちゃう...っ
イグツイグウッ!あッはああーっ♡♡!!!」







「おっんおっ！あつ…おおっ♡！しゅごっ…しゅごっ…しゅぎ…しゅぎ…しゅぎすぎるうう…っ♡!!!」

ややや!

ほあ♡

あ♡

あ!!

キッ

ん!!

あ!!

あつあつ!主も…主のチ○ポも…主とのセックスも…全部…全部しゅぎ…っ!だいしゅぎすぎるの!おおっ♡!!

「俺もだ…お前が好きすぎて…お前とのセックス気持ちよすぎて全然とまらない…っ!!」

ふふふ!!

ア!!

ふふふ!!

ア!!

ア!!

キッ

キッ

ア!!

ア!!

ア!!

ア!!

「んおっ！あっんあっ！くるっ……またイッちゃう……もう何度目か
分からないい……もうずつとずつとイッちゃつて……っんあっあっ♡!!!」

「はあはあイッてくれ……俺のモノで
……いくらでも……何度でもッ!!」

「ほあっんはあああっ！とまらない……アクメしちゃっあっ♡！
くるっイグイグッんあッイック……♡♡♡!!!」





「えっんぎッ…ひいい…ッすごいっ…イツてもイツても
気持ちいいの治まらない…っ毎回体震えて頭真っ白になるううっ♡!!」

「はあはあんあつ...もつともつとお...♡ずっとこうしていたい...
主に可愛がつてもらってずっと気持ちいいままがいい...♡!」

「ふあつああつんあつ♡わ、私...よかった...主と契約して...
主と出会えて...っ私、本当に幸せえ...っひあああんっ♡!」



「はあっあっあっ♡!あ、主が...全部教えてくれたの...
気持ちいいのも...誰かを好きになることも...何もかも全部うっ♡!!!」

「はあはあ俺だってそうだ...お前が勇気を出してくれたから...
お前を愛して...戦いだけだった俺に大切なものができた...
お前が傍にいてくれて俺は本当に幸せだ...っ!!」

「あつあつ嬉しい...嬉しいよおお...♡!!
しゅきっ!だいしゅき!♡♡♡
私、幸せすぎるよおお♡♡!!」



♡!! イツちゃいそう...♡!!

「はああっ、主と二緒に……気持ちよくなりたい……
気持ちいいのも……んあっ幸せなもの……ずっとずっと
主と二緒がいいっ♡♡!!!」

「はあはあ、ああ……俺も……もう出る……！俺も……ヘルと一緒にいいっ……!!」









「あっあっ……ああ……あ……♡♡!!」

「はあはあ……はあ……」

「あ……主い……♡」

とろん……♡

あ……!!

あ……!!

あ……!!

ヘルはそう言っで気を失い静かに眠った

ビクッ

「ヘル……」

俺も流石に疲れ果てていたのでそのまま眠ることにした……俺の腕の中で眠る大切なものを抱きしめながら……

ビクッ!!

ティン!!

ビクッ!!

ビクッ!!

とろん

とろん

とろん

ビクッ

ビクッ

ビクッ



俺達の戦いの日々は終わらない……でも

何故だろうか……俺は昔と違って

自分達が戦場で死ぬことはないんじゃないか……

そんな風に思うようになった

俺が人間じゃなくなったからだろうか……

俺達はこれからもずっとこうして二人で生きていく……

なんとなく……でも確かに俺はそう感じていた……

「主…有難う…私に歩み寄ってくれて…
主は不可神なんて呼ばれ、恐れられて一人でいた私に
愛すること…心を与えてくれた…」



「私のために人間じゃなくなってまで頑張ってくれた…
…強くて、勇敢で、ちょっと不器用で可愛くて
そして…本当に優しい…そんなあなたが私は大好き♡」

「これからもずっとずっとずっと
一緒にいてね！」



「世界で一番大好きな私だけの主っ♡」

あとがき

皆様ご無沙汰しております ワスです、
この度はこの作品をご購入いただき誠にありがとうございます
久しぶりの同人作品でしたがお楽しみいただけたでしょうか？ 今回は
今までの同人作品や商業の作品と違い和姦物でしたが
自分の妄想を爆発させて作り上げました すなわち「こんな女の子とイチャラブH
したい」というものです 相変わらずCG集制作は大変で予定より完成が
ずいぶん遅れてしまいましたが やっぱ楽しかったです
勢いに任せて作り上げたので 自分なりにチェックはしたのですが 間違いや
誤字脱字があってご迷惑をおかけしてしまうかもしれません
その他至らぬ所があるとは思いますが皆様申し訳ありません

CG集にしろ漫画にしろまだまだ同人活動はひっそりながらも続けさせていただこうと
思っています 商業の活動もしておりますので どこかでお見かけした時は皆様
どうぞよろしくお願い致します 感想などいただければ嬉しいです、

では今回はこのへんで またお会いしましょう。

タイトル：不可神な君のために

サークル：ワスの家

発行者：ワス

<https://pixiv.me./wasugabakuhatu>

画像の転載、web上でのデータ共有、無断データ販売、複製
同人誌ブログへの掲載はお止めください よろしく申し上げます。

